

# 東京物語

——映画文学人生論

監督：小津安二郎(1953年) 脚本：野田高悟 小津安二郎  
出演：平山周吉 笠智衆 撮影：厚田雄春  
平山とみ 東山千栄子 音楽：斎藤高順  
平山幸一 山村聡  
平山紀子 原節子 平山敬三 大阪志郎  
金子志げ 杉村春子 平山京子 香川京子

僕はトウフ屋だからトウフしか作らない

小津安二郎監督の映画『東京物語』を観る。お互いに遠くに離れた土地で暮らす現代の核家族の生活と悲哀が他人事とは思えない。

主人公の間宮周吉（笠智衆）は今の私とほぼ同じ年輩だ。私は彼のかもしだす人格のレベルには遠く及ばないが、「欲言やきりがなが、まあ、ええほうじゃよ」という心境を見習いたい。何故か漱石の則天去私に通じるものを感じる。

しかし、それよりはむしろ、せつかく尾道から東京へ出てきた老夫婦を心からもてなすことができなかつた長男（山村聡）や「親孝行、したいときには親はなし。さればとて、墓に布団も着せられず」と嘆く次男（大坂志郎）の後ろめたさに今の私の心はとらわれる。

やはり核家族は不自然だ。三世代か四世代が同居して暮らさなければほんとうの家族とはいえないと思う。封建的な大家族を嫌って、故郷から巣立ってきた昔の自分を忘れて、今さらそんなことをいってもどうにもならないが。

『東京物語』の封切は昭和二十八年、ちょうど私が故郷を離れた年だ。志賀直哉の小説『暗夜行路』を読んで感動した年でもある。その『暗夜行路』の舞台ともなった尾道で主人公の笠智衆が暮らしているのも何かの縁のようなものを感じる。

小津安二郎は日中戦争に従軍中、戦地で『暗夜行路』を読み、「激しいものに甚だうたれた。こ

# 東京物語

映画文学人生論



れは何年にもないことだった。誠に感ず」と日記に書いている。その後、カメラマンの厚田雄春が「今のうちに撮らないと、あの中に出て来る列車がなくなっちゃいますよ」といって映画化をすすめたとき、小津は「映画と小説は別物だよ。『暗夜行路』が映画に出来るものか」と答えた。

しかし、『東京物語』では尾道と列車をしつかり撮っている。東海道新幹線も山陽新幹線も開通していなかった当時の風物を映像のかたちで後世に残してくれているのだ。

『僕はトウフ屋だからトウフしか作らない』という小津は『暗夜行路』の気分を映画に翻訳して『東京物語』をつくったとはいえないだろうか。映画と小説とは別物だが、その内容の形式はどちらも夏目漱石のいう(F+f)である(Fは意識の焦点、fは情緒)。

映画は文学に劣ると、長い間、私は軽視していたが、すぐれた映画は(F+f)の形式をそなえた文学の一種かもしれない。『東京物語』は『暗夜行路』に匹敵する文学という気がしてきた。笠智衆に感化され、ぼけてしまったのだろうか。

『東京物語』は『暗夜行路』よりもわかりやすい。外国人でもわかる。日本の若い世代にもわかるだろう。わかりやすいけれども、小津のつくったトウフ味は奥が深い。

トウフ屋の命の果てのトウフ味